

第3回子どもの貧困対策検討会議 議事概要

日 時 平成28年9月1日(木) 午前9時30分～午前11時2分

場 所 本庁舎 6階 正庁

出席者 構成員：7名

事務局：地域福祉課長ほか

1 開会

2 議題

(1) 対象児童の抽出方法について

(事務局)

- ・資料1により、対象児童の抽出方法等について前回からの変更点を説明

(愛知県立大学 望月教授)

- ・資料1で、調査票の翻訳についても変更点として示されているが、質問には微妙なニュアンスがある。どのように翻訳し、確認していくのか。

(事務局)

- ・入札による委託契約となるが、原稿の翻訳だけではなく、ネイティブチェックを委託条件とすることを考えている。ネイティブチェックにより、ある程度信頼性のある翻訳になると思う。

(2) 質問表と仮説設定について

(日本福祉大学 末盛准教授)

- ・資料2により、子どもの貧困に関する先行研究等について説明

(名古屋短期大学 原田准教授)

- ・資料3により、沖縄子ども調査の調査項目に関する考察について説明

(事務局)

- ・資料4および5により、調査票の素案について説明

(岩城弁護士)

- ・経済的に困ったときに親がどのような対応をとるかという質問について、選択肢として消費者金融から借り入れるということはないか。
- ・貧困が見えにくくなっている理由は、所得格差だけではなく、借金の問題も結構あると思う。奨学金破産も現実としてある。過払金問題で消費者金融でも貸し渋りが出ている。所得があっても金策に走り回っている家庭は、生活状況は貧困であるし、精神的にも安定していないと思う。

(日本福祉大学 末盛准教授)

- ・選択肢として、ぜひ取り入れたい。

(人間環境大学 折出特任教授)

- ・末盛委員から説明のあったソーシャルキャピタル、地域の人々が信頼できるかという質問はとても大事だと思う。地域・社会との関係についての質問（問22）があるが、修正すべきか、それとも項目を追加すれば大丈夫なのか。

（日本福祉大学 末盛准教授）

- ・追加で考えているが、ボリュームがあるので非常に悩ましい。

（人間環境大学 折出特任教授）

- ・地域との関係、つきあいの状況を問う質問としては、現在の質問は妥当だと思う。しかし、信頼できる地域なのかという意味とはニュアンスが違う気がする。

（日本福祉大学 末盛准教授）

- ・育児不安・育児ストレスについての質問（問12）は、回答者にとって結構踏み込んでくる項目なので、個人的には項目数を減らしてもいいのではと思う。また、健康を害して貧困になることが多いので、疾病の有無についての質問（問24）を加えたが、不要であればその分のスペースが空く。質問票を16ページ以内に納めることが重要なので、質問項目全体を見ながら、何をに入れて何を外すのかを決める必要がある。

（名古屋短期大学 原田准教授）

- ・育児不安・育児ストレスについての質問（問12）は、マイナス面の項目が多いので減らしてもよいと思う。子どもとの関係についての質問（問21）も、減らしてもよいと思う。
- ・足立区の調査の質問項目を参考として、子どものいわゆる非認知能力、がんばろうとする力や自己コントロール力などを、親がどれだけ認識しているのかを質問する項目も入れたらどうか。

（愛知県立大学 望月教授）

- ・子どもとの関係についての質問（問21）のうち、絵本の読み聞かせについては、ブックスタート事業とあって、絵本が乳幼児期の親子関係を繋ぐ1つとして非常に大事であるとも考えられる。
- ・子どもの持ち物に関する質問（問16）については、沖縄と愛知では比較すべき品目が違って来るかもしれないので、何を持ち物として挙げるのか検討が必要だと思う。

（日本福祉大学 中村准教授）

- ・子どもの持ち物に関する質問（問16）については、愛知県ならではの調査項目の方がふさわしいと思う。
- ・育児不安・育児ストレスについての質問（問12）は、沖縄調査の前に実施した名古屋市の保育園保護者調査の調査項目を引用したものである。沖縄調査の結果は出ていないが、名古屋市の調査で貧困との相関が割と見られる項目に限ってもおかしくないと思う。しかし「子どもの世話にあまり関心がない」という質問に対して、驚くことに、名古屋市で200人・0.5%の保護者が関心がないと回答している。
- ・末盛委員から説明のあった貧困当事者達の「頼りたいけど頼れない」「やりたいのにできない」という状況が可視化できるよう、保護者もだが、子どもにも質問があった方がよいのではないかと感じた。本当はこういう物が欲しいとか、親に相談したいとか、思っても何らかの状況でできないという経験がどれだけあったかを聞くことにより、子どもの心の状態がよりリアルに把握できるのではないかと。

(人間環境大学 折出特任教授)

- ・育児不安・育児ストレスについての質問（問12）は、すべての項目があつていいと思う。子どもの育て方に向き合うことで、貧困の問題が働くということを知るのほども大事だと思う。

(愛知県立大学 望月教授)

- ・地域・社会との関係についての質問（問22）について、例えば乳幼児期であれば子育て支援センターなどの公的機関の位置づけは、子育てに係る支援制度の効果を把握する上で非常に重要だと思う。
- ・貧困のプロセスを考えたときに、貧困に陥る最初の階段が倒産、失業、けが、病気であると思う。こうしたプロセスを経験した人がどのくらいいるのか、どの段階にどれくらいの人がいるのか、そこから這い上がろうとしてどのような努力をしているのか、こうしたことが聞ければよいと思う。

(日本福祉大学 後藤教授)

- ・対応に関する質問について、公的機関への相談や消費者金融に頼るといった選択肢を加えるとよいと思う。貧困にも深さや持続性等いくつかのタイプがあり、タイプに応じた支援が必要となる。そのためには、どのような対応をしているか把握することが必要であると思う。

(日本福祉大学 末盛准教授)

- ・貧困の持続性や貧困に陥る頻度に関する質問は、政策的にも活かしやすい項目かと思う。
- ・保護者票で削除する項目の候補として、1つは親族に関する質問（問2-1）と地域・社会との関係についての質問（問22）は結構重なっている。2つ目は放課後の過ごし方に関する質問（問13）で、ここまで細かなくてもよいのではないか。後は、育児不安・育児ストレスについての質問（問12）を少しカットし、子どもとの関係についての質問（問21）も半分くらいにして、心の状態についての質問（問25）を削除し、その上で加える質問を精査していくのかと思う。

(日本福祉大学 後藤教授)

- ・次に、子ども票についての議論を深めたい。

(日本福祉大学 末盛准教授)

- ・学校・勉強に関する項目で、社会学の立場から言えば、学校の授業が理解できるかという質問（問9）は残してもよいと思う。もし貧困層で「分からない」というのが多い場合には、政策的には学習支援が大事だということが主張できる。
- ・成績がクラス内でどれくらいの順位かという質問（問8）は、学校によっても変わってくるので、カットしてもよいかと思う。

(人間環境大学 折出特任教授)

- ・ゆとり教育を脱しようと、つめこみ教育、学力向上運動となっている中で、貧困かどうかにかかわらず、学校の授業が分からない、ついていけないという子どもが増えつつある。勉強する意味、学ぶことの意味を問う方がリアリティがある気がする。「あなたは学校で勉強することの意味についてどう思いますか」という質問はストレートすぎるが、何かそうした角度を設けないと、見たいものが見えてこないと思う。

(日本福祉大学 末盛准教授)

- ・ 苅谷剛彦先生の研究で、学校で学ぶことの価値といった質問があったように思う。子ども達が勉強することにどれだけの価値をおいているのかという教育社会学の研究も参考にできると思う。それを成績がクラス内でどれくらいの順位かという質問（問8）の代わりに入れるのは、とてもよい案だと思う。

(名古屋短期大学 原田准教授)

- ・ 学校の授業が理解できるかという質問（問9）について、授業がわからないというのは主観が入るのでなんともいえないが、わかるかどうかという自分の判断を聞くことはよいと思う。ただ、わからないときに、わからなくてもよいのか、もっと勉強したいと思っているけれども例えば塾に行くお金がないためにわからないのか、という点も聞けたらよいと思う。

(日本福祉大学 末盛准教授)

- ・ 子ども票については8ページが最大で、まだ余裕はあるがいたずらに増やさない方がいいと思う。
- ・ 子どもがどれだけの相談行動ができるか、例えば親に悩みが話せるか、先生に質問できるか、友達に尋ねることができるか、といったところが聞ければよい。貧困状態の子どもほど相談行動ができづらくなっているという仮説はあり得るので、どのくらい本人が動ける状態かを把握して、保護者票で親の労働環境や帰宅時間についての質問があるので、親が忙しい家庭では子どもが親に相談しにくいという結果が出れば、非常に難しいということが理解できる。

(人間環境大学 折出特任教授)

- ・ 家庭についての質問（問18）において、質問に「お父さんやお母さんから」とあるが、ひとり親家庭の子どもにとっては反発が生まれる言葉だと思うので、「お父さんまたはお母さんから」としないとまずいと思う。

(愛知県立大学 望月教授)

- ・ 友だちの関係性についての質問（問5）について、関係性の貧困についてもう少し詳しく調べたい。困ったときに親に言えない、言えるような友だち関係がないことが関係性の貧困ということである。そのあたりの子どもが苦しんでいる状況をどうすれば聞き出せるのか、何とか工夫したい。

(名古屋短期大学 原田准教授)

- ・ 関係性の貧困について、「今一番願っていることは何か」という項目を追加してはどうか。選択肢として、3度の食事、安心して眠る、多くの友だちが持っている文具や玩具、相談できる大人や友だち、家で勉強できる場所や家族の理解、家族の絆でどうか。

(日本福祉大学 後藤教授)

- ・ 子どもが主観的にどういった困難を捉えているかが把握できる。

(日本福祉大学 末盛准教授)

- ・ 複数回答可として質問すると、丸がつくほど課題を抱えていることが分かる。一方で対応を聞くことで、困っているけれども対応できないことを捉えることができ、子どもの状態が立体に描けると思う。ライフイベントに近いと思うが、対応とともに聞く

ことで、かなりいい分析ができるのではないか。

(日本福祉大学 後藤教授)

- ・整理すると、一つは子どもの困難な状態として指摘されている項目をいくつか配置して、別の質問項目で子どもがどう対応しているかを聞くことで、それを併せて状況を捉えるという形とすることでいかがか。

(人間環境大学 折出特任教授)

- ・自分の経験では、小学校高学年の子どもが作文の中で3つの「しんゆう」という言葉を使っていた。親しい友と、信じる友と、心の友である。友だちの関係性についての質問(問5)についての望月委員の発言に共感するのだが、心の友、要するに親にも先生にも話せないことを話せる友だちがいるのか、欲しいのかを聞くことで、こうした環境にいる子どもたちの関係性が浮かび上がってくるかもしれない。

(日本福祉大学 中村准教授)

- ・夢についての質問(問4)について、小学5年生と中学2年生に聞く意味があるのではないか。将来どの学校まで行きたいかという質問(問11)もあるが、漠然と夢を聞くのも重要ではないかと思った。

(愛知県立大学 望月教授)

- ・夢というのは、言葉の聞き方の問題になるが、将来設計がやれているかということである。野球選手や宇宙飛行士になりたいとか、そういう次元の問題ではなくて、もう少し具体的なものであるかと思う。

(日本福祉大学 中村准教授)

- ・小学5年生と中学2年生で変わってくると思うので、また考えたい。

(岩城弁護士)

- ・貧困であれば工夫して一生懸命考えるという意見もあったが、逆だと思う。貧すれば鈍する、思考停止する。絶望感や無力感にとられることにより、貧困家庭の子どもたちに夢があるかと聞いた時に、「夢って何？」という反応になると思う。

(人間環境大学 折出特任教授)

- ・岩城委員の意見につながるが、夢がない理由(問4-1)はネガティブイメージで、ないのはなぜかと聞くことは酷だと思うので、やめた方がよい。

(名古屋短期大学 原田准教授)

- ・夢といっても漠然としているので、夢「又は目標」と付け加えるといいと思う。

3 閉会